

「保健医療科学」
第61巻 第1号 予告

特集：睡眠と健康 国内外の最新の動向—エビデンスからアクションへ—

日本における現状 (1) 保健分野：実態 (疫学), 人材育成 (公衆衛生) (仮題)	土井由利子
日本における現状 (2) 医療分野：実態 (①診断治療 (保険適用や適正使用) ② (睡眠専門医療機関や専門医, 睡眠健康推進機構), 人材育成 (臨床)) (仮題)	清水徹男
日本における現状 (3) 研究分野：分子生物学などを含め先端的な睡眠科学の知見や取り組みなど (仮題)	角谷寛
日本における現状 (4) 子どもの睡眠：睡眠習慣や睡眠障害の実態, 現行の取り組みや今後の展望など (仮題)	亀井雄一
アジアにおける取り組みの現状：各国の取り組み (トルコ, インド等々) (仮題)	大川匡子
睡眠時無呼吸症候群と健康：オーバービュー (特に勤労者), オーストラリアの睡眠健康施策 (仮題)	Ron Grunstein

編 集 後 記

2011年3月, 東日本を襲った未曾有の震災により, 多くの方が被災された。

震災時の保健医療については, 「保健医療科学」の前身「公衆衛生研究」第44巻第3号「阪神・淡路大震災と地域保健」特集の中で, 当事者の方々の座談会を含め公衆衛生従事者の活動を記録し, 災害時の保健活動がどうあるべきかについて検討している。阪神・淡路大震災をきっかけに国の健康危機管理研究への取り組みが始まり, 「平成13年地域健康危機管理ガイドライン」をはじめ, さまざまな形で成果が出てきている。

中越大地震, 中越沖大地震などの経験をもとに作成されたガイドライン, 記録様式, マニュアル類が, 今回の震災においてどれほど有効であったのか。水道や仮設住宅, 空気環境など暮らしの質の向上に寄与する学問分野においてどのような方向の研究をすることが発災時の健康被害の低減に結びつくのか。これら大きな視点からの総括のほか, テロリズム, DMAT, 緊急時被ばくなどのトピックを取り上げ, 今回の震災における活動と今後の方向性について論述していただいた。

最後に, これらの論文の内容を踏まえてこれまでの研究に不足していた部分, 修正すべき部分について考察し, 今後の研究のあり方について論じている。ぜひ, ご一読いただきたい。

(図書館サービス室 泉峰子)